

第3章 いわき市内被災者生活状況調査」の自由回答分析 ——震災2年後の困難と悩みの考察——

井口 高志

1. はじめに

2013年8月から11月にかけて¹配布・回収した、いわき市内被災者生活状況調査²の間16では、「現在、困っていることや悩んでいることはありますか。ご自由にお書きください」という質問文で、自由に現在困っていることなどを書いてもらった。この調査票調査では、現在の家族の状況、住居や経済状況、仕事、介護などを中心とした実態把握を中心としていたため、主な計量的分析は、それら項目に限られている（『いわき市内被災者生活状況調査報告（概要版）』参照）。その中で、この自由記述部分は、人々の意識や何を求めているのか、その時点でどういった悩みがあったのかを把握できる唯一の箇所である。

自由記述に関しては、いわゆる「生の声」として前述の概要版にその一部が抜粋されて掲載されている。しかし、ある程度の想定に沿った例示だけではなく、自由記述の回答全体の中からより情報を導き出せないだろうか。本稿では、その回答について、どういった人たちがどのようなことを書いていたのか、回答の傾向を調査実施後のコーディング作業を踏まえて、計量的に整理するとともに、その内容から示唆されることについて若干の考察を行う。自由記述はインタビューデータと同様に、テキストの内容を読み取る分析が最終的には中心になるが、「どういった部分を、何に注目して見ればよいのか」の指針を導くために、そうした計量的な整理が必要とされる。それは、その後のインタビュー調査の実施やそのデータを読み解いていく際にも示唆を与えるものであろう。

2. 回答数・記述量の基礎的集計

(1) 回答率・記述量

まず、全体としてどの程度の回答があったのかを簡単に確認しておきたい。回答数は355あり³、有効回答票中の61%の人が何らかのことを記述してくれたこととなる。記述の平均文字数は126文字で、中央値が84文字、最小値が4文字で最大値が790文字であった。回答文字数の度数分布を見ると、少ない回答文字数の度数が頂点になって、徐々に下って

¹ なお、いわき市の災害公営住宅は2014年3月に最初の32戸分への入居が開始し、2014年11月下旬時点で、予定戸数1513の内627戸分への入居が開始されている。今回の調査は応急仮設住宅（一時提供住宅）への入居者を対象に行ったが、その時点までに他都市への引っ越しや自宅再建をせず仮設住宅で生活している人たちの、恒久住宅への見通しとして少しずつ災害公営住宅の計画が見え始めて来る頃の悩みを切り取るような調査だと言える。

² 調査の方法・手続きなどについては『いわき市内被災者生活状況調査報告（概要版）』を参照。調査プロジェクト全体の中での位置づけについては調査プロジェクトの概要を参照。

³ 『いわき市内被災者生活状況調査報告（概要版）』では219と誤って記した。正しくはこの数値である。

いくスロープ型になっている（100 文字までに約 55%の回答が入っており、150 文字までに約 70%の回答が入っている）。

自由記述の回答の傾向は、現実の状況を反映しているという想定を重視するか、回答への意欲のようなものの存在の想定を重視するかで、分析していく上で考慮する変数が若干変わってくると思われる。すなわち、具体的には、回答者が含まれる世帯の属性で見る（回答者の記述が世帯状況の指標となっていると仮定する）のか、その記述を書いている回答者自身の属性で見る（回答者自身の志向を反映した記述と仮定する）のかで違いがあると思われるが、今回は、他の変数の計量的分析に主に用いられていた世帯類型別に見ていくこととする。すなわち、世帯の状況によって自由回答の記述に何らかの特徴が出てくるのかどうかを見ることに主眼を置くということとなり、前者の「現実の状況を反映している」という想定を重視することになる⁴。

世帯類型については表 1 のように有子（未成人の子がいる）世帯（A）と、それ以外の世帯に大きく分かれ、後者の中で高齢者世帯（B）か非高齢その他世帯（C）に大きく分かれる。その上で、単身か否か、男性か女性かに注目して、高齢世帯、それ以外の世帯の中を分けている分類となっている。世帯類型別の傾向を見ていく上で、基本的には、この 9 つの分類を出発点に見ていくが、類型が多すぎることでケース数が少なくなる問題を回避する必要もあるため、傾向を見ていく中で推測される要素に適宜注意しながら、高齢者世帯（B）か非高齢者世帯（A,C）か、有子（A）か否（B,C）か、単身（D）か否（E）か、などに適宜層を作りながら回答の傾向を見ていくこととする。

表 1. 9 つの世帯類型

A. 有子世帯	1 母子世帯
	2 その他有子世帯
B. 高齢者世帯	3 高齢単身女性
	4 高齢単身男性
	5 高齢夫婦
	6 高齢その他世帯
C. 非高齢その他世帯	7 非高齢単身女性
	8 非高齢単身男性
	9 非高齢その他世帯

表 2. 単身世帯か複数世帯か

D. 単身	3 高齢単身女性
	4 高齢単身男性
	7 非高齢単身女性
	8 非高齢単身男性
E. 複数世帯	1 母子世帯
	2 その他有子世帯
	5 高齢夫婦
	6 高齢その他世帯
	9 非高齢その他世帯

自由回答中の世帯類型別の構成比は図 1 のとおりである。高齢その他世帯の割合が高く、全体として高齢者のいる世帯の割合が 52%を占めている。これはほぼ今回の回答者全体の世帯類型別割合と同じである。

また、それぞれの世帯類型別に何割くらいの人たちが回答しているのかを見たのが表 3

⁴ なお、今回の調査においては、世帯表の最初に書かれている人が回答者でないケースも多いことが推測されるので、回答者という変数で見るのが妥当ではない、という判断もある。

である。高齢その他世帯、非高齢その他世帯の回答率が高くなっているのに比べて単身世帯や母子世帯の回答割合が低い傾向にある（単身世帯のみでまとめてみると、53.9%となっており、単身世帯の回答割合はやはり低い）。

世帯類型別の平均回答文字数を見ると、単身男性（高齢、非高齢）の記述文字数が少ないのが目立つ。一般的に回答数が多いほど、回答のばらつきが大きい可能性が高く、長文の回答が加わることで平均文字数が増えると思われるが、母子世帯は回答数 10 にもかかわらず、平均回答文字数 149.9 と平均以上になっていて、回答してくれた人は全体的にたくさん記述してくれたことが分かる⁵。参考に、母子世帯とその他有子世帯をまとめて有子世帯の平均文字数を見てみると、151.3 となり、子どものいる世帯において平均回答文字数が高いことがわかる。

図 1. 自由記述の内訳・世帯類型別割合（n=355）

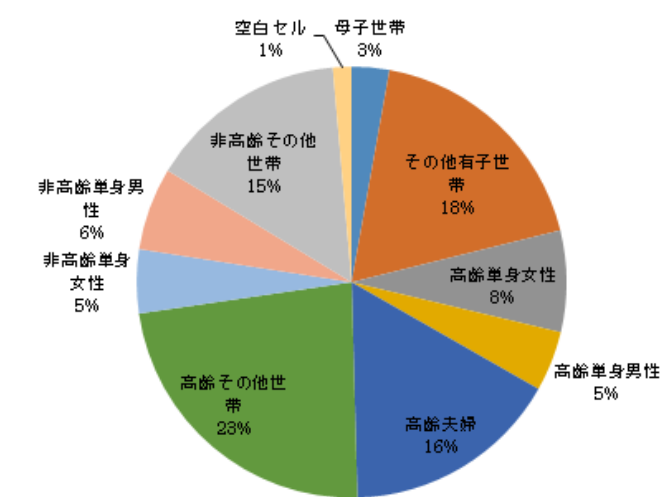


表 3. 世帯類型別回答数・回答率・回答平均文字数

カテゴリー	回答数	回答率 (対全回答者)	平均文字数
母子世帯 (19)	10	53%	149.9
その他有子世帯 (108)	65	60%	152.6
高齢単身女性 (52)	27	52%	150.2
高齢単身男性 (28)	16	57%	82.8
高齢夫婦 (92)	58	63%	111.1
高齢その他世帯 (123)	82	67%	137.0
非高齢単身女性 (30)	17	57%	145.9
非高齢単身男性 (42)	22	52%	77.2
非高齢その他世帯 (79)	53	67%	96.8

⁵ なお、母子世帯の他に、高齢単身女性、非高齢単身女性の平均文字数が比較的多いことから、女性が回答者である場合に記述が多くなっていることが推測される。

不明 (5)	5	56%	
(参考: 単身世帯(152))	82	53.9%	

(2) 頻出語の確認

自由記述の内容に踏み込んだ分析をしていくための参考に、文中に登場する単語の数や言葉同士の関連などを見ておくことは有益であると思われるため、テキストマイニング用ソフトの KH Coder で頻出語を確認した⁶。住宅、住まいに関する言葉の登場が圧倒的に多く、その他、生活、仕事、原発、子供、不安などの言葉が上位 30 に入っている⁷。

表 4. 出現頻度の高い語 30 (ケース毎、文書毎、単純出現回数)

段落単位 (ケース数)		文章単位 (出現文数)		単純出現回数	
抽出語	文書数 (段落)	抽出語	文書数 (文)	抽出語	出現回数
住宅	142	住宅	209	住宅	241
生活	102	生活	128	生活	139
現在	97	家	123	家	137
住む	97	住む	114	住む	125
家	91	現在	109	現在	111
思う	76	思う	100	思う	103
不安	72	不安	90	不安	90
震災	65	震災	80	震災	87
今	62	今	76	今	79
早い	60	早い	70	早い	73
借り上げ	46	復興	53	復興	57
原発	44	借り上げ	52	アパート	55
アパート	42	アパート	51	原発	55
災害	42	原発	51	入居	55
入居	42	入居	49	借り上げ	53
復興	41	いわき	47	いわき	52
前	39	子供	46	人	52
公営	38	災害	45	被災	51
困る	38	人	45	子供	50
心配	38	心配	44	建てる	47
いわき	37	建てる	43	災害	46

⁶ 分析については樋口 (2014) を参考にした。外部変数を用いたクロス集計や語と語との関連など、計量テキスト分析をより応用的に行っていくことも可能であるが、それは今後の課題とし、今回は自由記述へのラベル付けや整理の取っ掛かりとして用いた。

⁷ なお、その他、現在、今、早いなどの時間に関する言葉への言及の多さも特徴的であった。

建てる	37	公営	43	公営	45
子供	37	前	43	心配	45
津波	35	津波	42	家賃	44
家賃	33	家賃	41	自分	44
家族	32	困る	41	前	44
考える	32	被災	41	津波	43
自分	32	自分	40	仕事	42
出来る	32	家族	37	土地	42
仕事	31	仕事	37	困る	41

3. 自由記述のラベル付け

(1) 各ラベルの定義・数

以上のような計量的なテキスト分析、および本研究プロジェクトにおける問題設定に基づき、自由記述に悩みの種別のラベルをつけていく作業を行い、どういった悩みが多いのか傾向を把握した。ラベルの内容は、表5のように設定し、それぞれの数も表中に示した。これらのラベルは一つのケースに対して、複数付与される場合もあり、それぞれのラベルの数の合計だけでなく、複数付いているケースの数、その重なり方などが傾向を見ていく上での情報になる⁸。

KH Coder を用いた計量的なテキスト分析において住宅・住まいに関する言葉が多く登場していたが、これは、仮設住宅入居者への調査でもあるため、当然であろう。住宅・住まいに関する悩みは、大きく将来を含めた住まいの見通しに関するものと、現在の住宅（主にみなし仮設住宅としての借り上げアパート）に関する悩みの二つに分かれた。居住地の見通し（の不安定さ）に関して言及しているものに“居住地”というラベルを貼り、それが146と最も多くなっていた。また、現在住んでいる仮設住宅（借り上げ住宅が主）の“居住環境”に関する不満や悩みも81と多くなっていた。なお、居住環境とも関わってくる要素として、買い物や職場などへの交通手段に関する悩みがあると考えられ、“移動”というラベルを設けたが、数としては少なく14であった。

住まいに関するラベルに次いで多いのは、“経済”（102）である。このラベルは生活費や家賃など住宅にかかる費用などへの言及を中心に、世帯の経済的状況に関して悩んでいた

⁸ ただし、ラベルは必ずしも相互が独立ではないと思われるものもあるため、ラベルの設定については再度確認し直す必要がある（その際に前述の KH Coder の機能を最大限生かすこともできるだろう）。観点によって設定されるラベルも異なるだろう。たとえば『いわき市内被災者生活状況調査報告（概要版）』では、住まい（現在の住居・復興住宅・今後の住居）、仕事、身体的・精神的不安、日常生活、行政の対応という分類で整理をしている。またラベルが重なるといっても、自由記述欄に悩みが併記されているのか、何らかの関連を示した文章となっているのかで、その「重なり」の意味は異なってくるだろう。具体的な内容分析においては、その点に考慮する必要があるが（補論参照）、調査票調査の自由記述欄だけでは、そうした分析には限界がある面も多いため、実際にはインタビュー調査の際のガイド的な仮説を形成していくぐらいに考えておいた方がよいのかもしれない。

記述に付与した。世帯の経済状況とも大きくかかわる“仕事”(25)は意外に少なかったが、仕事をする事／しないことや、その内容よりも、まずは生活費や住まいに関する費用に関する事の方が懸念事項であったことがうかがえる。

次いで、“健康”に関する悩みも60と多かった。ここでの健康というラベルは、精神的な健康状態についての言及にも付けていったが、特に医療とかかわりのない漠然とした不安や無気力は、“無為無気力・不安”という別のラベルを貼った。また、自分自身ではない家族・親族などにおける他者の世話をしていることへ言及している“介護”ラベルには23ケースが該当した。

人間関係に関するラベルとして、“家族関係”(21)と“孤立・近隣関係”(38)の二つを設けた。家族関係には居住条件の変化に伴う問題が目立ち、密接になることでの関係悪化と、家族員同士が離れること(死別、離別、分かれての生活)の問題とがある。孤立・近隣関係には、地域や情報などからの孤立という内容と、近所との軋轢などが含まれる。

また、いわき市に特に顕著なのは、市内のほとんどの地域は福島第一原発の事故による避難指定地域ではないが、隣接し生活圏の重なる地域でもあるため、避難者たちの流入⁹や、地域イメージの変化など、事故と密接なかかわりを持っている点がある。具体的に、自由記述の中には、放射線や原発に関する懸念への言及があり、それに“原発・放射線”というラベルをつけた。また、避難地域からの避難者たちが市内の仮設住宅などに多く居住していることに関する市内への影響に付いて言及する記述も多く、特に、いわき市民の現状に対する行政や、いわき市以外の人々(マスメディア等)のまなざしに対する間違いの指摘や、正しい理解をとなえる記述、伝えて欲しいという記述などが目立った。そうした内容に言及しているものに“無理解”というラベルをつけると、その数は40あった。

表 5. ラベル名、定義、ケース数

ラベル	定義	数
経済	現在の生活費、ローンなど。現状に対する保障の不足なども。	102
仕事(雇用の安定)	仕事が見つからない。探している。仕事の収入低下など。	25
健康	病気や精神的不調などに関する言及。	60
無為無気力・不安	やる気が起こらない。漠然とした不安。	22
介護	介護に関する言及。別居の世話、介護不安なども含む。	23
居住環境	現在の居住地・住宅の環境設備に関する困りごとへの言及。	81
移動	買い物・通勤・通学など移動に関する困りごと。	14
孤立・近隣関係	住まいが変わってしまったことによる孤立。近所との諍い。	38
家族関係	家族間の問題への言及。関係の悪化。別居せざるを得ないこと。	21

⁹ 「経過 384【いわき市対策本部】9月25日17:00発表」東日本大震災の被害状況(2013年9月28日閲覧 <http://www.city.iwaki.fukushima.jp/info/002661.html>)によると、いわき市の人口327,993人(2013年9月1日)に対して、いわき市内への避難者の流入は23535名(双葉郡8町村小計22705名／南相馬市767名、田村市41名／川俣町3名、飯舘村19名)である。

居住地	次や最終的な落ち着き先に関する悩み。	146
原発・放射線	原発や放射線に対する不安への言及。	30
無理解	現状に対する報道や行政対応の誤解を嘆く。外部の人に理解を求めるもの。	40
その他	上記に当てはまらないもの。感謝などを示すもの。	11

ラベルは自由記述 1 ケースに複数付くが、1 つだけしか付かなかったケースが最も多く 182 で過半数を超え、2 つ付いたのが 106、3 つ付いたのが 46、4 つ付いたのが 16、5 つ付いたのが 1 であった。これらの数値は、回答者が自由記述の中で言及したかっと思われ
るものの数を示していて、必ずしもそのケースの現実の困難すべてを反映しているものではないが、特に 4 つや 5 つと悩みが重なったものに関しては、この震災後 2 年経った時期の複合的な困難について考察していく上で、取り上げるべき事例の一つの基準とすることができるだろう（補論参照）。また、2 つ以上が重なっているケースに関しては、どのラベル同士の重なりが多いかという点も、悩みや重なり複合的なありようを見ていく上で有益な情報となるだろう。

(2) 世帯類型別の自由記述回答の傾向

次に世帯類型別にどういった自由記述の傾向があるのか見ていこう。最終的に自由回答の記述は個々の具体的な記述を見ていく必要があるが、ここでは、数が少なすぎると割合の傾向を見ることが難しいため、25 未満のケースのラベルについては省略する。

表 6 の世帯 9 類型ではやや煩雑な部分もあるので、いくつかの類型を合わせて下記のように層別にし、傾向を読み解く上で参考にとすることとする。以下では、表 6 と表 7 を適宜参考にしながら、傾向を見ていく。

表 6. 世帯 9 類型別割合

	経済	仕事	健康	孤立・近隣関係	居住環境	居住地	原発・放射線	無理解
1 母子世帯 (10)	30.0%	10.0%	10.0%	20.0%	30.0%	50.0%	10.0%	10.0%
2 その他有子世帯 (65)	33.8%	9.2%	10.8%	7.7%	26.2%	41.5%	20.0%	16.9%
3 高齢単身女性 (27)	18.5%	3.7%	18.5%	29.6%	7.4%	59.3%	3.7%	11.1%
4 高齢単身男性 (16)	25.0%	6.3%	6.3%	31.3%	37.5%	37.5%	6.3%	0.0%
5 高齢夫婦 (58)	20.7%	5.2%	27.6%	5.2%	15.5%	37.9%	5.2%	5.2%
6 高齢その他世帯 (82)	28.0%	4.9%	17.1%	9.8%	31.7%	39.0%	6.1%	14.6%
7 非高齢単身女性 (17)	17.6%	5.9%	23.5%	11.8%	17.6%	58.8%	0.0%	17.6%
8 非高齢単身男性 (22)	22.7%	18.2%	4.5%	9.1%	13.6%	45.5%	4.5%	9.1%
9 非高齢その他世帯 (53)	43.4%	7.5%	17.0%	3.8%	20.8%	32.1%	9.4%	7.5%
空白セル (5)	40.0%	0.0%	40.0%	20.0%	20.0%	20.0%	0.0%	20.0%
全体	28.7%	7.0%	16.9%	10.7%	22.8%	41.1%	8.5%	11.3%

表 7. 層別割合

	経済	仕事	健康	孤立・近隣関係	居住環境	居住地	原発・放射線	無理解
有子世帯（75）	33.3%	9.3%	10.7%	9.3%	26.7%	42.7%	18.7%	16.0%
高齢者世帯（183）	24.0%	4.9%	19.7%	13.1%	23.5%	41.5%	5.5%	9.8%
非高齢無子世帯（92）	33.7%	9.8%	15.2%	6.5%	18.5%	40.2%	6.5%	9.8%
単身者（82）	20.7%	8.5%	13.4%	20.7%	17.1%	51.2%	3.7%	9.8%
高齢単身者（43）	20.9%	4.7%	14.0%	30.2%	18.6%	51.2%	4.7%	7.0%
非高齢単身者（39）	20.5%	12.8%	12.8%	10.3%	15.4%	51.3%	2.6%	12.8%

①経済

経済に関しては、表7のように、有子世帯や非高齢無子世帯という層を作ってみると、それぞれ3割ぐらいとやや割合が高くなっている。

表6で言及率の若干の高さを示す、非高齢その他世帯、その他有子世帯での経済に関する悩みは、実際の世帯の経済水準の高低もちろんあるだろうが、現役の雇用者が多く含まれる層のため、震災後の状況変化によって、収入の低下の幅（または出費）が全体の対象者中で相対的に大きかったこと、そのために経済に関する悩みのラベルが多く付いたのではないかと考えられるだろう。あるいは、住宅取得を見込む層ゆえにローンなどの大きな支出が予想されるためという場合もあるだろう。たとえば、以下のような記述があった。

新築3年にてマイホームは全壊流失し、多額のローンが残りました。地震保険は加入しておらず。無い家のローンを払い続けております。今年、一月から国のガイドラインにて相談し、結果待ちです。減免がいくらまでになるか、また、来年は子供が大学進学を熱望しており私も応援したいと思いますが何分、今は無き家のローン＋今後住居費（災害公営住居入居予定）＋子供の学費＋生活費等、考えると少しでもローンが減ってくれることを祈るだけです。そのような事で夫とはトラブル耐えず私も不安定になり暴言など言ったり、精神的にかなりまいっております。でも食べていくためには仕事も休めず薬を服用しながらの毎日です。再建に向けて早く希望をもちたいです。何よりもローンの問題が我が家ではかなり重圧です。…（後略）…。（その他有子世帯）

この記述からは、有子世帯においては、子どもの成長に伴う教育費用もかかり、そこに公営住宅の家賃が加わってくことで、経済問題に関する悩みが生まれてくることが見られる。その他、その他非高齢世帯からの記述の例として、「夫婦別居生活となり、家事が大変です。二重生活でお金も大変です。原発事故さえなければこんなことにはならなかったはずです。精神的苦痛です」（その他非高齢世帯、＋家族関係、原発・放射線）「ローンを組まないと家が建てられないのでその返済を考えている（60才すぎてしまったので）」（その他非高齢世帯）があった。被災以前の生活に比した時の落差の大きさが見てとれる。

ただし、表6の9類型で見た時、割合が若干高い（ただし全体のケースとしてはとても少ない）母子世帯の場合、震災前後の生活水準の変動幅もあるだろうが、もともと母子世

帯であることで存在していた経済的な悩みの延長上で経済の問題が現れているのかもしれない。このあたりは震災前と後との保障や支援のあり方との関係で考察していくべき点であろう。たとえば、以下のような記述があった。

災害公営住宅に入居できるのであれば、早く入居したいのですが母子家庭で収入も少なく親が残した借金を払いながらの生活なので、今度は家賃もかかってしまうので、生活が今以上に苦しくなると思うと不安だらけである。生きているのも疲れてきた(母子)。

②仕事

仕事に関しては、ラベルがついたケースが 25 と少ないが、非高齢単身男性の言及率の高さを反映して、非高齢単身者層で言及している人がやや多い。自らが仕事をするのが生計に直結していること、実際の無業率の高さ(田宮・四方の「いわき市内被災者生活状況調査」まとめ参照)、不安定な仕事であることを反映しているかもしれない。たとえば、非高齢単身男性の仕事ラベルの付いた記述は 3 ケースあり、下記のような不安定な仕事の状況に悩んでいる記述があった。

震災で家族をなくしてしまったので一人暮らしの生活の不安。非正規雇用の仕事の不安。(来年の 3 月で現在の仕事は任期終了)(非高齢単身男性)

今年 60 才を迎え、現在、継続雇用者として働いているが、1 年位しか働けず、その後の仕事について考えている。(非高齢単身男性)

また、働いている人が回答者、および世帯成員として含まれる、母子世帯やその他有子世帯にも記述が見られた。たとえば、「夫の仕事は震災後休職中。私は子供が小さくて働く所がなかなかみつからない。働けたとしても預ってくれる親等はいないので学校&幼稚園の後預ける費用がプラスされて働いた分の賃金は、ほとんど預ける費用にいく形なので意味がない」(その他有子)といった育児と仕事とのバランスの難しさに関する記述や、「近所に知りあいもおらず、職場も被災当時に住んでいた所に近く、ここからじゃ、通勤に 40 分はかかってしまう。就業時間も少なくなり、収入も少なくなり、早く災害住宅へ引越をして生活を整えたい」(母子)というように、住居の移動によって通勤時間がかかるようになることで就業時間が確保できないという記述も見られた。

③健康

健康に関しては、やはり高齢者世帯で割合が高くなっている。特に高齢夫婦の割合が高く、世帯成員のすべてが高齢期にあることで健康問題に直面する可能性が高くなっていることがうかがえる。たとえば、「震災前より身体(夫ーパーキンソン病)の調子はよくなったが、震災後、2 部屋(夫婦)のせまいアパートに住んでいたせいか(1 年間)夫の体の調子が悪くなり、現在、週 4 回位、デイケアに通院してますが、家にいる時は車いすで

私が介護してます。今のところ、がんばってすごしています」(高齢夫婦)というように震災前からの状態が居住環境に伴って悪化したケースがある。また、「現在 2 人共病院通い(本人)は半年入院、やっと 8 月 12 日退院し、リハビリに通院頑張っていますが、80 才の高齢では。妻の私も足が不自由で杖つきですが、男であってみれば、可哀想な思いです」(高齢夫婦)とあるように、両者ともに健康問題を抱えているケースもあった。こうしたケースには、介護というラベルも付いている。

また、非高齢単身女性、高齢単身女性で健康に言及する割合が若干高かった。その内容としては、下記のような寄る辺なさに関連した不安や、孤立に関連した健康状態、精神状態の悪化に関する記述などが見られた。

震災により津波、自身、火事ですべて焼けて何もなくなりました。体に何もなかったことは幸いでしたが、針一本、下着一枚から改めて買わなければならない状況で、とても不安な日々を過ごしてきています。今も夜は眠れず医者に通っています。今後被災者向け市営住宅を希望していますが、元がいわき市の A でしたが B を希望しています。その市営には希望者が多いらしく、入れるかどうか不安です。(非高齢単身女性)。

常に不安感あり。将来の生活・健康について(住居も含めて)。震災後、健康状態が悪化。震災後、閉じこもりがちになったと思う。何をするにも面倒くさく思える。上記を含めて先が見えないのが何より不安を感じ生きる意義が感じられない。借上げ住宅に住んでいると情報がなかなか得られない。(高齢単身女性)

下記のように、被災後に一人で色々な手続きをするということも健康状態の悪化につながると捉えている記述も見られた。

1 人ですと引越しの時や市にもろもろの手続、何事も自分で処理をして次のステップへ向きたいのですが疲れや、病院の通院、環境の変化かくる心の不安定又これから先の移住や引越しも大変です。年金生活者ですしこれからが心配ですし考えると体のバランスをくずし体調にも不担当がきます。(高齢単身女性)

④孤立・近隣関係

孤立・近隣関係に関しては、単身者、特に高齢単身者での言及率が高い。以下のような付き合いが減少したという記述が多く見られた。

現在の住まいは、集合住宅のため閉鎖的で訪問者がいないと言葉を交わすことがありません。そのせいかわかりませんが震災前より話す単語が少なくなりました。精神の不安定も出てきています。不定期のようですが、保健所と民生委員とそれぞれ訪れて下さったことは有り難く思っています。(高齢単身女性)

バス停まで 20 分歩くので夏の暑さのひどい日はほとんど外へ出られません。どう

しても行かなければならない病院へはタクシーを使うこともあります。買い物はパルシステムを利用しているので助かっています。あと困っているのは人との交流がないこと。知らない人の集まりなのでいつまでも個人的なつきあいがなく、友人、親戚がこない日は一日中喋らないでいることが多くて淋しいというか、つまらないというか仕方なく FM ラジオを聴いています。（高齢単身女性）

孤立に関する言及の中には、「仮設住宅に入所していると様々な、支援や情報の早さなど、恵まれていると感じるか、借上住宅に居ると何一つ情報が入らない時があり、支援もなく、被災者の中でも、市や県、国が何もしてくれないと実感して来た」（非高齢単身女性）という風に、借り上げ住宅における孤立の感覚を、プレハブ仮設との差異¹⁰という表現で伝える記述が目立った。他に近隣関係に関する悩みとして騒音など住環境から来る隣人との関係や、有子世帯において子どもの同世代との交流の不足などが挙げられていた。

⑤居住環境

居住環境に関しては表6の9類型で見た場合には、高齢単身男性からの言及率が高いが、もともとのケース数が少なく6ケースである。居住環境の悩みは、集合住宅の狭さへの言及が大半を占めている。したがって、高齢単身男性以外の世帯類型別で見ると、高齢その他世帯や有子世帯（母子世帯とその他有子世帯）での言及率が高く、単身世帯全体ではそれほど割合が高くない。仮設住宅の居住条件に対して世帯人員が多い人たちがこの悩みに言及したことが想定される¹¹。以下のような記述がある。

部屋がせまく、トイレとバスが一緒のため不便。子供のこれからの健康。子供の健診の時に、今の家は子育てには不向きと言われ市役所に相談したが相手にされず、毎日市営住宅や県営住宅に申し込んでいるが当たらず、民間のアパートも手当り次第さがしているが、どこも空いていないため、泣く泣く今の借り上げに住んでいる。（その他有子）

三人で3DKに住んでいます。生活空間が狭い。プライベートな時間（場所）が持てない。人間関係（親子・夫婦）が最悪の状態になった。（高齢その他）

他方で、高齢単身世帯においては、以下のように車の運転や身体的条件との関連で、居住環境の悩みとなっているケースがある。

皆様のご支援によりお蔭様で雨風しのげる生活が送られている事心より感謝致し

¹⁰ いわき市の津波被災者の仮設住宅の大半が借り上げ型であることを考えると、ここでのプレハブへの言及は、より可視化して表象される原発避難の被災者を表現したものと思われる。

¹¹ ただし、居住環境の悩みに関しては、広さに関するものだけではなく、他に集合住宅が高層であること、駐車場の問題（ない、部屋から遠い）などが挙げられていた。

ております。ただこのアパート高台にあるので車の運転が出来る内は良いのですが歩行にての買い物には不便なので早くC地区の集合住宅に移れたらと思っております。勝手なことばかりですみません今後とも宜しくお願いいたします。(高齢単身女性)

⑥居住地

居住地が決まらないこと、どこに定めるかについての悩みは、自由記述全体の中で最も割合が高く、仮設住宅で生活している時期の悩みの中心を占めていると思われるが、特に単身世帯において高くなっていた。被災後に単身世帯になった以下の記述のように、もともとの三世代同居などによる他世代世帯が分かれることで居住地を悩んでいるという記述があった。

子どもと意見が合わないのでどうしていいかわかりません。長男は別に家族と暮らしています。元の自宅の場所の近くに災害住宅ができれば住みたいらしいですが、私は便利のいい場所に住みたいと思っています。高台移転も何年先かわからないです。自宅もローンがあるので悩んでいます。(非高齢単身女性)

しかし、単身世帯の記述で目立ったのは、下記のような、もともと小規模世帯であった人たちの記述であった。

現在住んでいる仮設住宅（アパート）に平成 27 年 3 月までとなっていますがそれ以降も住んでいられるのか？独り暮らしなので色んな面で不安です。(高齢単身男性)

現在住んでいる借上住居は、仕事をしているところにあるので、(近くに) 支援が終了しても、仕事が続くかぎり住む事はできると思うが現在のオーナー（社長）が変わったり仕事が終わってしまうと、仕事と、住居の両方が又なくなってしまうので、あとなん年この生活が続けていけるかが心配です。ただ、今の仕事は、仕事場と住居が近いので続けていける仕事なので公営住宅に、申し込んではいますが、そこに入ると仕事は続けていけないです。ペットもいますし、捨ててはいけません。今の心境としては、考え出すと、気が滅入って生活でいえないので「なる様にしかならない。(非高齢単身女性)

一つ目の記述は、震災前は二人暮らしの世帯であり、二つ目の記述は震災前から一人暮らしの非の記述である。二つ目の記述からは、居住地と仕事とが深く結びついており、住まいの拠点を決めることがジレンマとなっていることが見て取れる。

また、居住地に関する言及率を 9 類型別に見た場合、顕著なのは、高齢単身女性、非高齢単身女性、母子世帯の順で、女性の回答者の言及率が高いことであった。

⑦原発・放射線

原発・放射線に関しては、子どもの健康や生活環境との関連で、有子世帯において強い不安を示す言及が目立つ。また、居住地の選択との関連で、下記のようなジレンマに言及

する記述もあった。

原発の 30km 以内に自宅があり、半壊状態です。子供がいるので、自宅には戻りたくない。万が一、自宅に戻る様な事があっても、自宅を修理するお金はない（ローンが残っているし、子供の学費がかかってくるので…）。今は、借り上げの家賃が無償なので助かっているがそれが終わったら家賃が払えるのか、心配です。電力からの賠償金は、2011 年の 12 月でおわっているし、半壊では、復興住宅の対象者にもならないし、つらいところです。（その他有子世帯）

⑧無理解

無理解のラベルが付く回答のほとんどは、いわき市の中での支援の量の格差や、原発避難者の増大による生活環境の変化に言及しているものである。避難者や行政に対する批判的なまなざしを示すものもあった。その他、孤立・近隣関係のところで言及したように、借り上げ仮設への支援の届かなさについて言及するものもあった。

4. 調査プロジェクト全体中での自由記述分析の位置

以上、ラベルをつけて 2013 年 8 月～10 月ころにかけて記述された、仮設入居者への調査の自由回答の内容の傾向を簡単に整理・分析した。自由回答は、調査票調査において記載の任意性がより高くなり、またその内容の量や質にばらつきが出る。そのため、データとしては、あくまでも多くの悩みごとの中から、その時点で言及されたことに過ぎず、この結果自体が実態をどの程度反映しているのかの判断には慎重でなくてはならない。しかし、たとえば本論で行ったように世帯類型ごと、あるいは層ごとのある程度の傾向をつかむことで、その後のインタビュー調査において、アプローチする対象の選定の一つの基準となったり、インタビュー調査で得られたデータで注目する点を示唆してくれたりするものとなるだろう。また、2015 年 1 月末に行った継続調査でも同様の項目で自由記述の回答を得ている。今後、そのデータを見ていく上でも指針を与えてくれるものとなるだろう。

なお、ここで行ったようなラベルをつけて数を数えていくような作業とは別様の自由記述の整理・分析の仕方もちろんあり得る。特に今回の調査では手書きで結構な分量を記述することで現状の悩みを示してくれた人たちもいる（追加調査では、追加の用紙を添えてくれた方もいた）。そうした個別のケースの記述の厚さのようなものをどう位置づけて分析していくかについては、本稿では言及し切れなかったため、覚え書き的に次に補論として掲載しておきたい。

■参考文献

樋口耕一、2014、『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版。

補論. 個々の自由記述データの位置付けに関する考察

井口 高志

1. 自由記述の整理・分析の指針

今回、自由記述の分析においては、全体的な数と世帯類型別の傾向を単純化して把握するために、悩みの大まかな特徴を示すラベルをつけて分析をしていったが、各ラベルの付いた自由記述の中身は、今度は内容を精査していくと一つのラベルの中も複数の悩みの内容に分割できる。また複数のラベルが重なる事例からは、単独のラベルの内容を見ているだけでは見えてこない悩みのあり様も見えてくるだろう。本調査における自由回答の記述の位置づけは、本論で述べたように、それだけで完結した分析を可能にするデータというよりも、インタビュー調査の指針を得るようなものである。しかし、自由記述の内容のみの範囲である程度の整理・分析をしていくとしたら、こういった指針があり得るか、簡単に覚え書きを記しておきたい。

ある程度分類や計量的な整理をした後、自由回答の記述は、その内容に注目して一つ一つのケースを見ていく必要がある。それが最終的な分析の目的であろう。しかし、任意性の高い自由記述の回答には、その記述量や内容にむらがある。個別の内容を見ようとしたときに、どのケースの自由回答に注目するかは、一般的には、①文字数が多いこと（悩みについて背景や理由を細かく書いているもの）、②複数ラベルが重なっていることなどが指標となる。これは、複合的な生活問題を捉える本研究プロジェクトの主旨に照らしても妥当であろう。①と②を二つの指標とすると、以下のような組み合わせで、自由回答の各ケースのデータとしての性質を整理することができる。

まず個別分析のケースとして特に注目したい記述は、a「文字数が多く、複数のラベルが付与されたもの」である。そうした事例から生活における複合的な困難のありようを読み取ることができる。これは、インタビュー調査を行うという関心ともつながるものであり、自由記述の中で、相対的にインタビュー調査で得られるデータと近い性格のものである。たとえば、以下のような記述である¹²。

現在、借り上げ住宅で生活しています。小学生の子供がいるのですが、学区外からの通学になっているので、毎日の送迎が大変です。（時間、ガソリン代等）他の小学校で学区外から通学の子供達は、1ボックスカーやバスで通学している様子。市に相談した所、借り上げ住宅はバラバラなので近くの同じ学校の親と協力してみても、との答え。そんな大きい車持ってないし、地域によって差があるのは不満。復興公営住宅が、まだ着工されていない。ので、転校させるべきか、わからない。教育委員会も、その辺の配慮が見られない。借上げ住宅は、地域になじめない面がある。しかも市内で津波被災で引っ越して来たのに、原発避難の人とまちがえられて、ゴミ出しのマナ

¹² 文字数などの分析においては、若干の記述の揺れを直した程度のテキストをベースに分析したが、事例として抜粋する場合は、個人が特定される情報などを削除して掲載している。

一が悪いとおこられる。説明したけど。市の生活支援相談員の方や、ボランティアの人も、めったに来ないので、忘れられた感がする。「被災者のつどい」に行っても、原発避難の人ばかりで、津波の被災者ほとんどいなくて、東電の保証金の話ばかりで嫌になる。その方達に、津波被災者はバカにされる。被災ビンボーと呼ばれる。「罹災証明」の全壊の人は、一律で同じ全額のお見舞金をいただいたり赤十字さんに家電もらったりしたけど、家が流されて何もない全壊流出の人と家の柱がまがった全壊の人と、同じ対応なのはおかしい。今でも、扱いは一緒。(母子)

この記述には、居住環境、移動、孤立・近隣関係、居住地というラベルが付いた。たとえばこうした事例からは移動の問題は居住地の見通しと関係していることや、地域での孤立の問題は、必ずしも「被災者のつどい」という同じ被災者同士と思われる場所で解消されるわけでもないことが見えてくる。もちろん、この記述のみだけでは解釈が難しいのだが、こうした複合的な困難の記述に注目することで、次にインタビューをしていく対象の選定の参考になったり、インタビューの際に注目するポイントを探ったりする指針となるだろう。

それに対して、b「文字数が多く、ラベル数が1つ」の記述は、ある特定のことを述べようとして回答者が書いたものであるゆえ、あるラベルの悩みの内容や背景についてより深い情報を与えてくれる。ただし、そこで書かれていることそのものが、必ずしも全体の中で一般的なものや、「典型」であるわけではない。後述するγやσにあたるような記述も含めて経験的一般化をした上で、その具体的な内容を示す例示として使われたり、印象的な特徴を示すケースとなるだろう。たとえば、「家族関係」や「居住地」というラベルのみついた以下のような長文の記述がある。

・家族関係

家族がばらばらになっていることがすごくつらいです。でも、私たちだけではないと思うとあまり口に出すのはできません。自分たちだけで解決しようとしたんですが、結果的にできず、今に至っています。もう、震災が原因なのか家族の問題なのか正直わかりません。皆さん同じかもしれませんが、もう一度元に戻りたい。不可能かもしれませんが、自分たちの力だけではどうにもなりません。甘いかと思われるかも分かりませんが、公的や自分のわかる範囲でどうにかできないかと相談しても、帰ってくる返事は「それは震災ではなく家族の事情」と…。そうかもしれませんが、少しの可能性にかけてみたいと希望があればと、でももう家族が同じ家に戻るのは無理に近いのかなと最近感じます。どうかどうか、何万人の被災した人の分、悩み、困り事があるかと思います。このように伝えられる場を作ってくださいありがとうございます。(非高齢その他)

・居住地

1日もはやく落ち着きたいです。高台移転する事には決まったのですが、早くライフラインを整備していただくこと、切に願います。高台に住む事になるのですが、道路の事を心配しています。現在、避難道路としても新しい便利な道路を皆で嘆願して

おります。復興予算を無駄に使わず、私達被災者に有効に使うことを心から願っております。被災者の都合ではなく行政の遅れで、消費税は上がるし、家を再建するには、材料費は上がるばかり、とても不安な日々を過ごしております。私達の仲間もなくなつたほうも降ります。私達は時間に限りがあります。震災から2年5ヶ月過ぎ、焦りと不安でストレスになっております。とにかく尚一そうのスピーディを願っております。(高齢夫婦)

以上の記述を見ると分かるようにβに当たる記述は一つしかラベルが付いていないが、そこで起こっている悩みの背景には行政の対応など、悩みの遠因の指摘が出てくる。あらかじめ設定したラベルの重なりはないのだが、こうした記述を読むことで、設定したラベルとは違う背景や問題の奥行きが見えてくる。そうした意味で、aとbとの違いは相対的なものだと言える。

このような文字数が多い記述に対して、自由記述の内容を分析していこうとするとき、文字数が少ないものにはあまり注目しないだろう。c「文字数が少なく、複数のラベルが付いているもの」は、箇条書き的に書かれている記述であり、d「文字数が少なく、ラベル数が1つ」のものは、簡単に今悩んでいるものを1つ書いてくれたものである。

このcやdは、あるラベルにおける一般的な悩みを端的に示すような単語や文であり、その数を数えることにも馴染む。たとえば、本論で述べたようなラベル自体が、主にはそれらの記述を数えていくことで設定されたものである。また、文字数が多い記述の内、bも文章全体で1つのことを言っているので、数えることに馴染みやすい。しかしながら、それらに対して、aのような記述は、複合的な悩みが連関して現れている記述のため、どのラベルのところで取り上げてよいのか分かりにくく、記述の一部を切り取ることで、その事例全体の特徴が失われてしまう。逆に言うと、記述の一部を切り取ることで、ラベルを付けることが可能となっており、本論におけるラベル付けと計量的な整理の際にもそうした操作を行っている。

以上のデータの性質に関する整理をまとめると、自由記述は、以下の二つのタイプの扱いができるだろう。一つは、今回行ったことと重なると思われる、cとdのデータを主に用いて、ラベルの内容を考えたり、ラベル毎に自由記述を整理することである。その際に、各ラベルに対応するbのような分量のある記述がある場合は、それを、そのラベルにおける具体的な例示とすることができる。もう一つは、aに当たる複合的な悩みを示す記述の分析である。これはインタビュー調査のデータ同様に、複合的な困難の内実の事例となるだろう。以上のような方針に基づく整理と分析は、ここでは十分に示せないが、『いわき市内被災者生活状況調査報告(概要版)』において自由記述が列挙されているため、参考に以下でそれらを抜粋して掲載する。比較的長めの記述が抜粋されているので、ここで言うようなaやbに当たるような記述を読むことができる。

表 8. 自由記述データの種別分類

データの類型	ラベル作り	例示	記述そのものの内容分析	概算 *1
a. 文字数が多。複数のラベル	○	○	◎	93 *2

	断片化してカウント	ただし、複雑なため位置づけにくい	インタビュータにより近い	
b. 文字数が多。ラベル数 1	◎ 全体の内容からカウント	◎ 分かりやすく豊富な記述	○	37
c. 文字数が少。複数のラベル	◎ 箇条書き的に一つ一つカウント	△	×	82 ^{*3}
d. 文字数が少。ラベル数 1	◎ 端的な記述からカウント	△	×	143

※1. 暫定的に平均文字数 126 を基準に多い少ないを判断

※2. a の内訳はラベル 2 つが 45、3 つが 31、4 つが 16、5 つが 1。 c の内訳はラベル 2 つが 61、3 つが 18、4 つが 3。

2. 自由記述の抜粋

以下、『いわき市内被災者生活状況調査報告（概要版）』に掲載した自由記述を再掲する。分類ラベルは今回の分析で付けたものと異なっている。なお、誤字と考えられる箇所や、個人が特定されるおそれのある箇所について、回答の一部を変更しているものも含まれる。

1) 住まい（現在の住居・復興住宅・今後の住居）

・家族 5 人で、3 畳、4.5 畳、6 畳、玄関に住んでいるため、とてもせまいです。せめて、あと 1 軒借りる事が出来たらいいのと思います。5 人の荷物となると布団など置く所がなく、私は仮設に来てから布団に寝た事がなく、長ザブトンに寝ています。それと、となりの物音がすごくひびきます。いくらただとはいえ、夏はあつく冬は寒いです。雨の音もすごいです。でも、皆さんによくしてもらって頑張っています。もう少しでここを出られそうなのであと半年、頑張ります。

・両隣の物音、いびき、寝ごと、電子レンジの音と、すべての音が聞こえ、自分の物音も聞こえていると思い、神経を使い疲れます。

・現在借り上げのアパートに入居していますが、一間に二人でいることは慣れてきましたが、ストレスに感じています。家というのは古くても心の支えなんだなと感じました。復興住宅ができて 1 日も早く入居できれば、今はそれが一番の望みです。

・借り上げ住宅の 3 畳 1 間の生活に困っています。何の情報もなく老人なので困り果てています。

・現在の住まいは台所が狭い。又風呂にはシャワーがない。入浴するとき浴槽は狭くて高さが高いので非常に不便である。

・現在、借り上げ住宅で生活しています。小学生の子供がいるのですが、学区外からの通学になっているので、毎日の送迎が大変です（時間、ガソリン代等）。他の小学校で学区外から通学の子供達は、ワンボックスカーやバスで通学している様子。市に相談した所、借上

げ住宅はバラバラなので近くの同じ学校の親と協力してみても、との答え。そんな大きい車持っていないし、地域によって差があるのは不満。復興公営住宅がまだ着工されていないので、転校させるべきか、わからない。教育委員会もその辺の配慮が見られない。

- ・1 番困っていることは、交通の便がわるいことです。前に住んでいた時は、バス停が家から1分ほどでしたが今は、バス停まで20～30分かかります。足がわるく車の免許もなく、前より病院に行ったり買い物に1人で行くことも出来なくなりました。

- ・家は4階の為、上り下りがとても大変ではやく別のところに引越出来ないか考えています。

- ・26年4月頃から復興アパートに移行…ということなのですが、家族5人が3LDKに住むには狭すぎて引っ越しの決断がつかない。たとえ家賃がかかろうが、現在の借り上げ住宅に住むしかないかと考えている。同地区の大半の人々が他地区に家を建ててしまっている状況の元、どのようなコミュニティになるのか不安。それどころか住む場所（土地）さえ決まっていない。すべて不安だらけです。

- ・私の家は全壊致しました。義援金や市の救助金が世帯の人数によって金額がことなり1人住まいですと大幅に減額については不公平だと思いました。家を再建するにしても補助金も1人住まいですと金額も差をつけられています。1人ですと引越しの時や市にもろもろの手続、何事も自分で処理をして次のステップへ向きたいのですが疲れや、病院の通院、環境の変化からくる心の不安定又これから先の移住や引越しも大変です。年金生活者ですし、これからが心配ですし、考えると体のバランスをくずし体調にも負担がきます。私達、全壊した人に対しては納得のいく、義援金や支援金にさせていただきたいと思います。この先不安がつります。借上げ住宅は、地域になじめない面がある。

- ・現在借り上げ住宅に入居していますが、元々民間の借屋に住み被災しました。市の復興住宅を申し込み予定ですが以前の民間住宅がこわれたまま残っているので復興住宅の申し込みは出来ないと言われました。形がこわれても残っていれば申し込みが出来ないのは、こまっています。

2) 仕事

- ・避難したため、収入がなく、今も生活が苦しく、この先の生活をどの様になって行くか不安の毎日です。いわきの場合は、原発の収束がわからず、子、孫達の先が見えずとても不安です。原発のため、収入も前の3分の1もなく、生活が苦しいです。先の見えない毎日が不安です。

- ・水産加工業を営んでいたが、東電の事故のため仕事ができずにいる。

- ・何の仕事でも良い、働きたい（収入、お金がほしいです）。

- ・私自身今年に入ってから体調を崩し会社を辞めることに。手術を受け今リハビリの状態、手に力が入りにくく字を書くのもとても辛い。仕事をしないとやばいのに体がまいちなので気持ちばかりが焦る感じ…。家のローンはあるし無い物に支払うのはとても辛い…。今は家賃が取られないのでいいが、この先が心配です。

3) 身体的・精神的不安

- ・震災前より身体（夫）の調子はよくなかったが震災後、2 部屋（夫婦）のせまいアパー

トに住んでいたせいか（１年間）夫の体の調子が悪くなり、現在、週４回位、デイケアに通院していますが、家にいる時は車いすで私が介護してます。今のところ、がんばってすごしています。

- ・自宅が流出したため、一時提供住宅に住んでいるが、期日が到来し、別の地域への引っ越しを余儀なくされると、コミュニティがなくなり、介護認定を受けた義母の容態も思わしくなくなっている為、介護施設への入所を希望している。しかし、順番待ちの方が多数いる為、年内の入所は困難であるという。介護するような病状になった理由のひとつは、避難所を変わらざるをえない移動による疲労によるものである。

- ・子どもたちも離れて生活しており、高齢で、介護の不安は絶えずつきまとっています。気力がなく、毎日が穏やかに生活している状態から、いつ立ち直るといってもないままの日々です。私の体力があるうちは面倒を見れますが、私の方もめまいなどあり、不安な材料は増えなければと思っています。悲観的になってしまっていますが、正直老いることの恐ろしさをしみじみ感じています。心のどこかに老いに負けてたまるか、との気がしないわけではありません。とにかく私が頑張らなければ生活が成り立たない状態です。

- ・老後、のんびりこの家で最後までと思っていたものが、未曾有の大震災で我家もなくなり、ショックが妻の体にも心にもものしかかり、施設に今は居る状況。早く落ち着いた生活に戻れるよう、県、市の情報も入らず、不安になる事ばかりある。

- ・まわりの人は「頑張って」と言うけれど何をどんなふうに頑張れば？今「頑張れ」が一番きらいな「ことば」です。精神的に体調をくずし、とにかく、自分の部屋でゆっくり眠り、自分の家でのんびりしたい。

- ・ストレスがたまってどうしようもない。平成23年3月11日前の生活に早く戻りたい。

- ・妻を亡くして一人になった時にやはり考えてしまう。

- ・家族がばらばらになっていることがすごくつらいです。でも、私たちだけではないと思うとあまり口に出すのはできません。自分たちだけで解決しようとしたましたが、結果的にできず、今に至っています。もう、震災が原因なのか家族の問題なのか正直わかりません。皆さん同じかもしれませんが、もう一度元に戻りたい。不可能かもしれませんが。

4) 日常生活

- ・バス停まで20分歩くので夏の暑さのひどい日はほとんど外へ出られません。どうしても行かなければならない病院へはタクシーを使うこともあります。買い物は民間の宅配サービスを利用しているので助かっています。あと困っているのは人との交流がないこと。知らない人の集まりなのでいつまでも個人的なつきあいがなく、友人、親戚がこない日は一日中喋らないでいることが多くて淋しいというか、つまらないというか。仕方なくFMラジオを聴いています。

- ・まわりは空地がほとんどない位、家がたって来ました。もう70才をすぎました。夕方家々に明りがともり初めた頃が一番きらいです。わかっているのですが、どうして私の家がないのか涙がでます。パートで少しは働いてますが、一日1日さみしさと孤独と言うものが身にしみてます。孤独死と言うのはわかります。何かあっても連絡のしようがありません。私だけではないのですが。

- ・震災により家を失い、一時はどのように再建していこうかと悩み、寝れない夜が続きま

した。でも家族全員元気で働くことが出来前向きに考えられるようになりました。ただ心配なことは放射線による孫達への影響です。前例のない事だけに不安でいっぱいです！！

(5)行政の対応

- ・プレハブ仮設は、ボランティアの方が来て、いろいろな事がある様ですが、民間借り上げ住宅は、個人情報を開示しなければ我々には何も届かないのです。酷い差別です。月に一度包括支援センターの方が来るだけです。9 月いわきの市長選がありましたが、情報が入らず誰に投票して良いのかわからず棄権しました。原発、未だ終息つかず呆れています。

- ・震災当時と何も変わっていない現実。原発の近くに住まいのある方が、自分の家に住めないといい、ありえないくらいの金額をもらい、私たちの住んでいる土地を買い漁る有り様を知っていますか？津波で家を流されゼロからスタートをし、少しの支援をいただき生活をしているいわき市民と原発の方の温度差をわかっていただきたい。

- ・福島県は原発のこともあるので大変です。いわき市は東電からのお金も少ししか貰えないので、何か原発周辺の被災者との格差があるので変な感じです。

- ・復旧、復興の工事が目で見ても進んでいない事が頭の痛いところです。国や県の方でも被災者の身になってもっと力を入れて復興に全力を注いでほしい！

- ・災害用公営住宅の建設の遅れは、高齢者をかかえている私などには、早く入居できないのかと…遅すぎる。聞くところによると仮設住宅に入所していると様々な支援や情報の早さなど、恵まれていると感じるが、借上住宅に居ると何一つ情報が入らない時があり、支援もなく、被災者の中でも、市や県、国が何もしてくれないと実感して来た。これから先、本当に、生活改善に向けて、きちんと支援や協力をしてもらえるのか。「震災は過去のもの」ではなく、これからも元気になれるまで、寄りそってほしい。